

年賀状

阿波ゆかりの



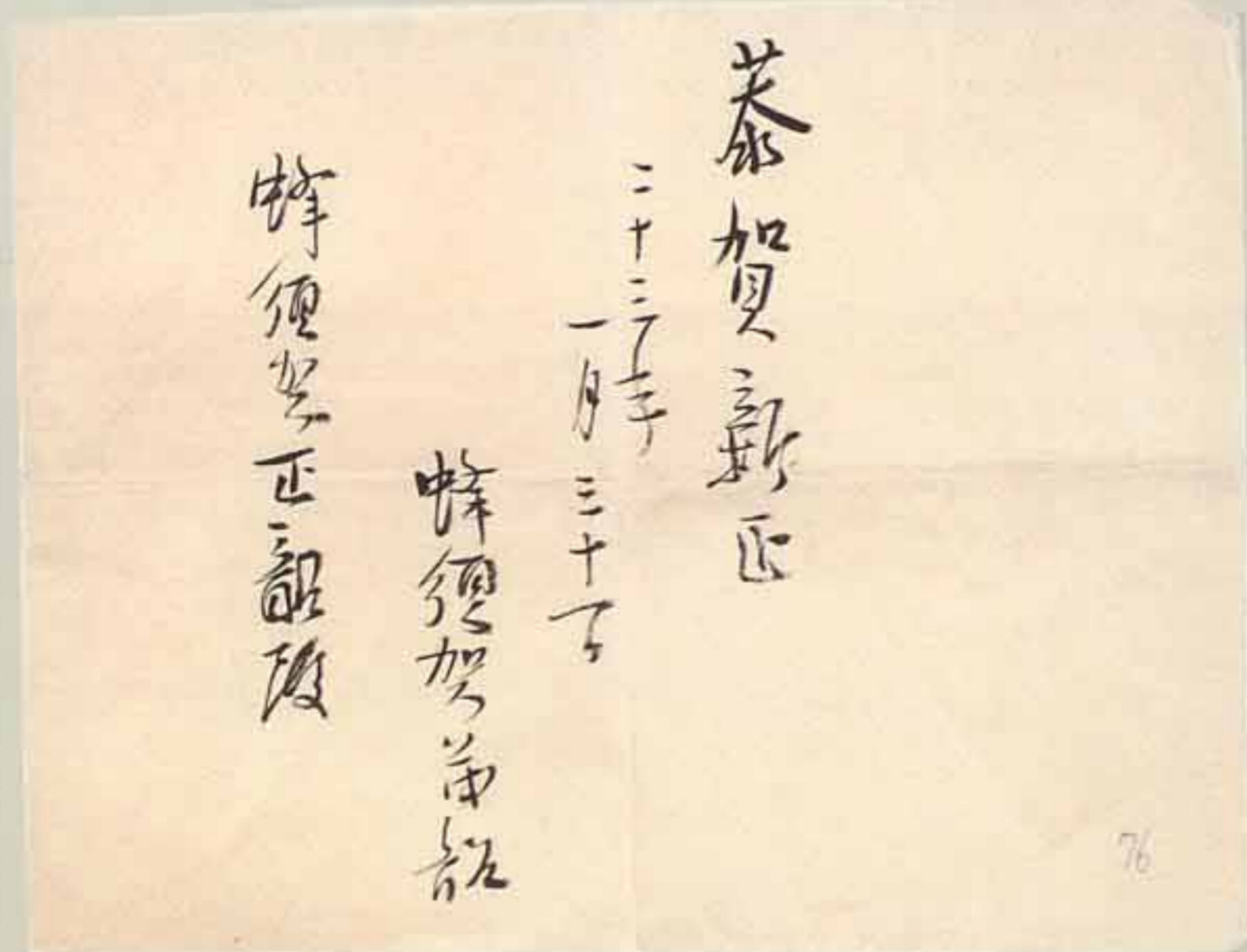
文化の森総合公園

徳島県立文書館

年始と年賀状



暦を兼ねた年賀状（明治23年）



最期の阿波藩主蜂須賀茂韶が、イギリス留学中の息子正昭に出した年賀状



昭和13年に

古い日本の習慣では「年賀」といえば、四十歳、五十歳などの人生の区切りになる年齢を祝うことで、お正月を祝うことは「年始の賀」といわれた。正月は、年の元（初め）、時（季節）の元、日の元を意味する「三元」として古代から祝われ、主人や親しい人達の間での物品の贈答は古くから行われたが、年賀状交換の習慣は比較的新しい習慣といえます。

年賀状は、十五世紀のドイツにおいてクリスマスと正月を祝う銅版のカードが印刷されたのが最初とされています。

日本では、享保二年（一七一七）に武家の作法集として出版された「礼容筆粹」という本に「年始の状は、ただ発端より新稔之慶賀不可有休期御座候（新稔の慶賀やむ期ござ有るべからず候）」と書くべし。新春之御慶、改年之吉慶などと書くべし」とあるのが最初のころのものと考えられます。江戸時代には、年賀状は封書として、正月に書かれるものであるという常識がありました。

年賀状を手軽に出し始めるようになったのは、明治六年（一八七三）の郵便はがきの発売以後のことです。明治三十九年（一九〇六）年には年賀葉書が制度化されてから増え続けましたが、昭和十五年の八億四千枚を最高に、戦争によって一時中断しました。

昭和二十三年（一九四八）に年賀葉書の取扱いが再開され、翌二十四年にはお年玉付き年賀葉書が発売されてから急激に増え、現在では約三十八億枚、国民一人当たり、三十枚出す計算になります。

古くから伝わった正月行事がすべて衰退し、明治に始まった年賀葉書がわが国唯一の国民的な正月行事になりつつあります。



右葉書六枚 横井家文書

初めてのお年玉くじ付き

徳島県立文書館の今回の展示は、本館所蔵資料を中心に「年賀状」に焦点を当てました。正月を祝う風習は、世界の民族にとって共通のもですが、それぞれの民族によつてその祝い方や軽重に大きな異が見られます。

農耕民族であった日本人にとつて、正月は農作業の区切りとして、一年の豊作を祈願する最も重要な祝日でした。

一年中の行事をすべて農作業と合わせていた太陰暦（旧暦）が廃止され、明治時代になって西洋流の太陽暦が採用されてからは、暦と現実とがずれるようになり農村では新旧の暦を二重に利用するというのが最近までありました。

また戦後の激しい社会変動によつて日本人の多くが農業から切り離され、いよいよ正月の持つ意味が変わってきました。

最近では、正月に家で餅をつくこともほとんどなくなり、子供が凧を揚げたりコマを廻して遊ぶことも見れなくなりました。

正月の行事といえば、明治時代に始まった年賀状の交換だけという現象が、都会を中心にして日本人の現実となっております。

今回は、藍住町歴史資料館・藍の館から奥村家の年賀葉書もお借りして、蜂須賀家・横井家・渡辺家などの年始祝い・年賀葉書などを展示しました。年末から年始にかけて正月行事の移り変わりの一面を御覧いただければと存じます。

なお、資料を提供していただいた奥村家を初め、多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

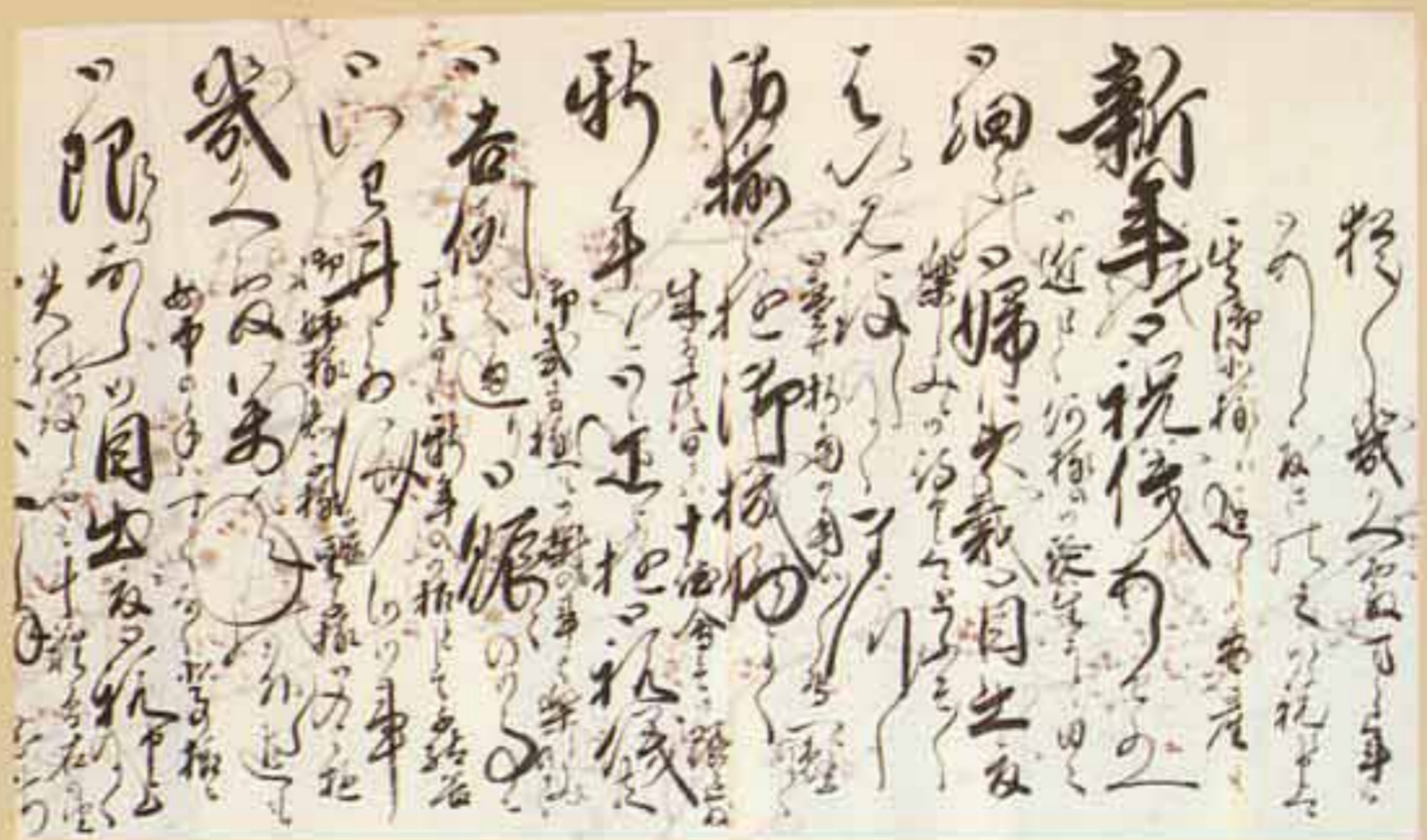
徳島県立文書館長 大和武生



年賀電報（昭和34年）



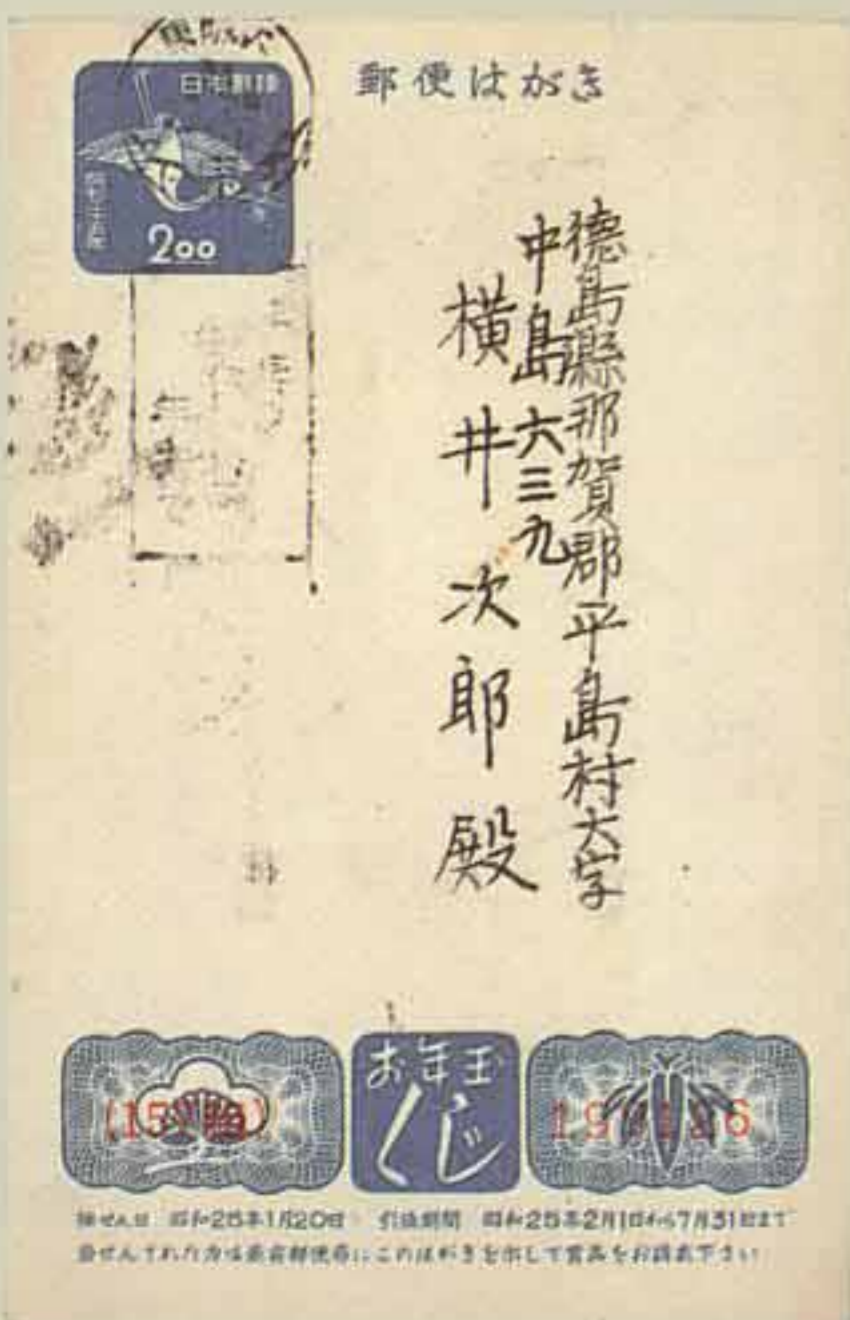
出された年賀状



正月らしい梅の花に彩られた表紙の年賀状は、姉妹である一橋鉄子から蜂須賀筆子に出されたものである。華やかで細やかな色使いの封筒や料紙に季節感があふれている。

上の写真がその内容であるが、「新年の御祝儀と」で始まる文章が本文であり、料紙の初めから書かれている「猶々」で始まり、行間に本文より小さな字で書かれている文章は追伸である。

その文の内容は、新年の挨拶と仲の良い姉妹の近況報告であるが、年に一度このような機会によつて近況を報告しあうことも年賀状の大事な機能なのではないだろうか。



年賀状（昭和25年）

新年の御祝儀と
 して御婦ミ下され
 悦入候寒氣之折
 先ツ御障なく悦入候
 当方一同無異超年
 致候間御心易かるへく候
 又其内御目ニかゝられ候
 御陰様ニて悦入
 誠ニ樂シミに存居候是
 よりも新年の御祝儀
 申入度御返事取束
 あら々々申入候目出度
 可祝
 一月
 十六日 慶喜
 筆子殿へ
 御返事
 尚々当年八余程
 暖氣にて暮し能
 覚申候其御地も定て
 例年より暖氣と存候
 乍末皆々様へよろしく
 御頼ミ申候也

徳川慶喜が娘筆子にあてた年賀状

筆子宛に出された年賀状には、正詔の母であり姑
 となる随子からの書簡や、姉妹である経子、鉄子か
 らの書簡が残されている。封筒や料紙に工夫を凝ら
 し華やかさ競っているようである。

TOKUGAWA

新正の御目出度申納候先以て相変らず益御壯健
 御重歳賀入候次ニ私事も同様其事加年候間御安
 着早速開封一讀仕候處あまりの嬉しさに又々くり
 かへし申し候一年月御かへり御待申上候も云々難有存候併し
 来月六月頃ニハ總數度の試験相終へく覚悟故二年
 程と申すと長く候得共是迄御同様結婚の日を相待候
 時日ニ比へ候得共短く候大凡其頃ニ卒業致へく其上ハ
 帰朝其上ハ……申すニ及ばず候近頃「パークシヤ」と
 申す「カウンチー」即チ縣の「ブラク子ル」と申す英國中ニて木の多く
 はハ居景色の好き所ニ教師を取り住居致居候本年
 六月ニハ普通試験を受け候心組ニて其後ハ「ケンブリツチ」の
 大学校へ帰校可致候只今教へくれをる教師本家の
 写真をくれ候筈故受取次第御母様御手元迄相送り
 候間御一覽有之度候御歌は難有存候返句
 御送申上度併し未だ出来不申候間後便ニ
 御送申上へ候早々めて度
 かしく

筆子殿へ
 御返事
 尚々当年八余程
 暖氣にて暮し能
 覚申候其御地も定て
 例年より暖氣と存候
 乍末皆々様へよろしく
 御頼ミ申候也

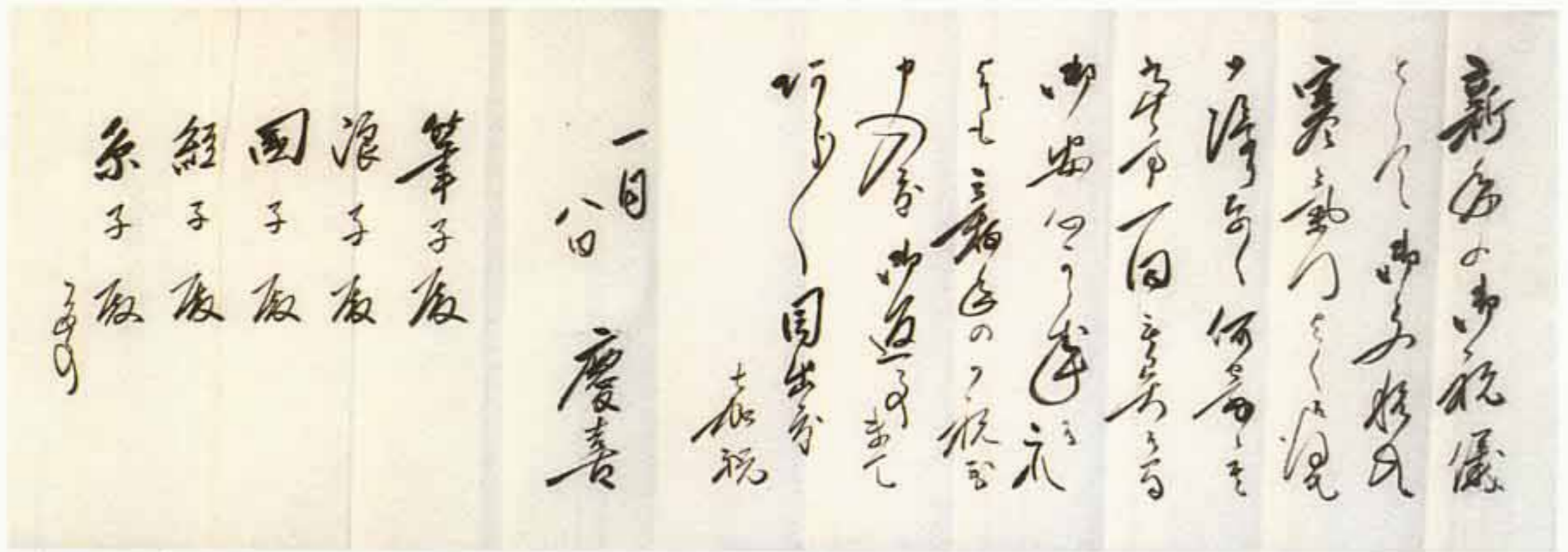
イギリス留学中の正詔が婚約中の筆子にあてた年賀状

筆子殿へ
 御返事
 尚々当年八余程
 暖氣にて暮し能
 覚申候其御地も定て
 例年より暖氣と存候
 乍末皆々様へよろしく
 御頼ミ申候也

正詔の母随子が筆子にあてた年賀状

明治二十七年一月十五日

蜂須賀正詔



徳川慶喜が娘筆子らにあてた年賀状

新年の御祝儀
 として御文悦入候
 寒気つよく候得共
 御障りなく何奇二候
 当方一同無異候間
 御安心可被成候これ
 よりも新年の御祝儀
 申入度御返事まで
 何分々々目出度
 嘉祝
 一月
 八日 慶喜
 筆子様
 浪子様
 國子様
 経子様
 糸子様
 御返事

年賀状にみる意外な間柄

— 蜂須賀家と徳川家 —

HACHISUKA

阿波藩最後の藩主蜂須賀茂韶の父斉昭は、十一代将軍徳川家斉の子であり、徳川家と蜂須賀家は近い間柄であった。茂韶の嫡子正韶も最後の将軍である徳川慶喜の娘である筆子と結ばれた。筆子は、慶喜から深く愛されていたようで、当館にも三十八通もの書簡が残っている。

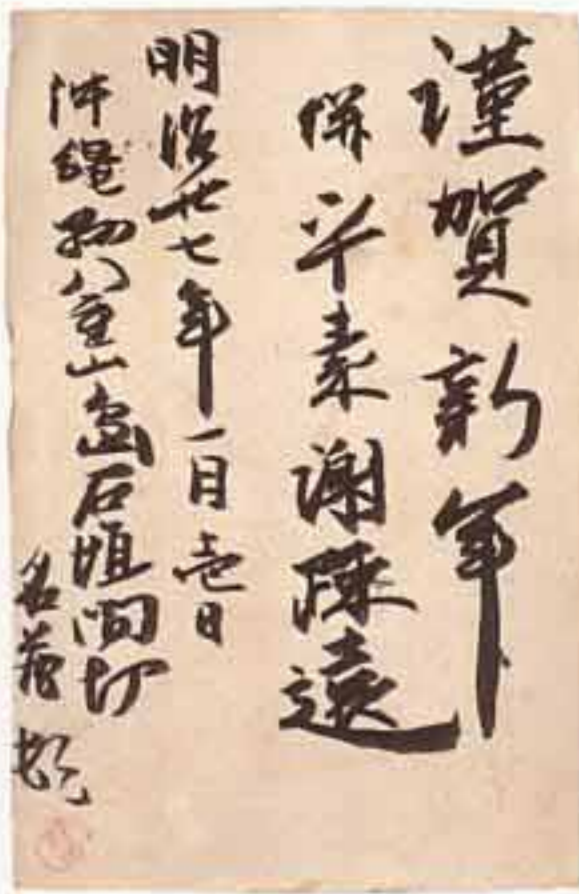
明治二十年代正韶は、英国ケンブリッジ大学に留学しており、その最中に筆子との婚約が決まった様である。書簡の内容も婚約時代の華やいた雰囲気の内容になっている。



妹鉄子が姉筆子にあてた年賀状



妹経子が姉筆子にあてた年賀状



沖縄石垣島から出された年賀状（明治27年）



横井家

年賀状

横井家は、近代以降木材・製材業者として那賀川河口の中島港（那賀川町）で営業していたが、現在では芦屋市に拠点を移し、横井林業として先祖の業種を守りつつ、営業部門を広げてきている。

横井家の資料は、藩政時代の古文書はそれほど多くはないが、近代の木材関係の帳簿等は膨大な分量に上り、それらの資料が非常に几帳面に保存されていた。

これら多岐にわたる資料群は、収集者の精神的バイタリティーの強靭さ、教養と趣味の深さや広さを如実に物語るものである。



松岡康毅の年賀状

この年賀状の宛名である井上三千太は小松島の大商人であり、阿波藩の藩船であった蒸気船鵬翔丸の払い下げを受け海運業に当たらせていた。その航路は、いくつかの変遷をたどるが東北航路に従事していたこともあった。

差出人である斎藤虎三は、鵬翔丸の船長で、陸中国鉄ヶ崎港（岩手県）から新年の挨拶と共に、修理をしつつ航海を続けている船の現状を報告している。



奥村家で作った、戦中の状況を示す年賀状



情から考えると、ずいぶん贅沢な年賀状が使用されていたことも知らされる。大正期になると、まず印刷術に長足の進歩をみせていることに気付く。とくに百貨店や専門店などからのダイレクトメールを兼ねた年賀状は多色刷りで美しいものが多く、また各地の旅館などからのものも、まさに美術品といえるような年賀状も楽しい。

昭和に入ると、まず注目させられるのは年賀状に戦時色が濃厚に反映していることであろう。奥村家の未使用のものにも、日独伊防共協定の締結を記念する昭和十六年のものもある。また小学生が互いに年賀状をやりとりすることが流行していることも、たいへん興味深いことで、各年次の絵柄を並べるだけでも、その時代の流れがよく反映していることが知られる。こうして、年賀状にも近代日本史の流れをみるのができ、そこに史料の価値を再発見させられるように思える。

（三好 昭一郎）



商店から出された宣伝を兼ねた年賀状



昭和初期に出されたカラフルな年賀状



三木与吉郎から出された名刺大の簡易な年賀状



編集・発行 徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八六・六八三・七〇〇

印刷 原田印刷出版株式会社

〒770 徳島市西大工町四ノ五
電話 〇八八六・三三三・三五六

展示資料目録

資料名	年代	備考
1 徳川慶喜(書簡)	明治期 1月	ハチス
2 徳川慶喜(書簡)	(明治28年) 1月	ハチス
3 蜂須賀茂韶(書簡)	(明治27年) 1月	ハチス
4 蜂須賀茂韶(書簡)	(明治23年) 1月	ハチス
5 蜂須賀正韶(書簡)	(明治27年) 1月	ハチス
6 蜂須賀正韶(書簡)	(明治28年) 1月	ハチス
7 蜂須賀筆子(書簡)	明治期 1月	ハチス
8 蜂須賀随子(書簡)	(明治27年) 1月	ハチス
9 一橋鉄子(書簡)	明治期 1月	ハチス
10 徳川経子(書簡)	明治期 1月	ハチス
11 松岡康毅(書簡)	明治期 1月	ワタナ133
12 松岡康毅(書簡)	明治期 1月	ワタナ135
13 斎藤虎三(書簡)	(明治14年) 1月	イノウ
14 横井家文書(葉書)	明治期～昭和期	県立文書館保管
15 井上家文書(葉書)	明治期	県立文書館保管
16 岩城家文書(葉書)	明治期	県立文書館保管
17 奥村家文書(葉書)	明治期～昭和期	藍住町立歴史資料館所蔵